

早稲田文学（第10次）発行停止に係る経緯

1891年に創刊された「早稲田文学」は、1997年以降、早稲田大学文学学術院教授会が発行権を持ち、文学学術院長を発行人とする文芸誌として、編集および発行を同教授会構成員である編集人（編集発行人）に委託し、同教授会構成員から選出された委員が、運営委員会を構成して発行をサポートしてきました。「早稲田文学」の編集および発行の業務は、編集人（編集発行人）と早稲田文学会により行われ、早稲田大学から文学学術院を經由して、早稲田文学会に発行補助費が支出されていました。

2021年に入り、文学学術院現代文芸コースおよび文芸・ジャーナリズム論系において、カリキュラム改革が進められ、今後、「早稲田文学」を授業などで教科書や参考図書として使用する見込みがなくなりました。このことを受けて、2021年10月、文学学術院教授会は、「早稲田文学」の持つ文化的役割と教育的役割のうち、後者の教育的役割を失ったと判断して、学費や税金を原資とする活動に一旦の区切りを設けることにし、「早稲田文学」の発行権を放棄することを決定しました。文学学術院教授会の決定を受けて、早稲田大学は、2021年度をもって文学学術院に対する発行補助費を停止するとともに、「早稲田文学」の発行を停止することにしました。2022年2月、それを早稲田文学編集室にも通達したことで、同3月刊行の「増刊 家族号」が第10次の最終号となりました。なお、発行再開の時期などは未定です。

「早稲田文学」は、これまで教育的・社会的役割を長年にわたり果たしてきました。とりわけ1997年以降は、2名の芥川賞作家を輩出するなど、創作・翻訳・評論の各領域でもさまざまな達成がありました。そのような歴史を鑑みるにつけ、このたびの停止判断は、苦渋のものでした。発行権を手放すとされた文学学術院での議論および理事会の決定は、早稲田文学の誌面および編集業務の問題ではなく、あくまで教育上のカリキュラムとの関連にもとづいたものです。

第七次以降の「早稲田文学」は、立原正秋の「慶應と早稲田、同じ力量なら慶應出身者を用いるべし」との基準を受け継ぎ、作品掲載はただその力量を基準とするなど、その時々々の編集室や編集委員が真摯に誌面を作ってきました。そうした伝統が、いずれ復刊の際にも引き継がれていかれることを願っております。早稲田大学と編集室との間の雇用関係の整備が進まぬなか、限られた人員と予算の中での運営でしたが、そのなかでも編集室のスタッフは、一般的な商業文芸誌に比べて遙かに少ない予算で、業務に関して誠実に運営してくれました。私財を投じた故・平岡篤頼氏から、直近の編集人の貝澤哉氏、制作総指揮の市川真人氏ら専任教員も、一切の報酬を受け取ることなく、多大な貢献をしてくれました。同時に、「早稲田文学」は、永年にわたり、熱心に仕事に取り組み、様々な世界へと羽ばたいていった学生編集員たちによっても支えられていたことを附記します。関わってくれた過去の、あるいは現在の学生をはじめとする関係者に感謝いたします。

早稲田大学常任理事（文化推進担当）

渡邊 義浩